特別連載企画　荒川上流部改修100年 vol. 3

企画・制作／埼玉新聞社東京支社

荒川上流部改修100周年シンポジウム

未来へ継承すべきこと

1918（大正7）年に始まった国直轄の荒川上流部改修から百年が経つのを機に、「荒川上流部改修100周年シンポジウム」（同実行委員会主催）がこのほど、川越市で開かれた。パネルディスカッションでは埼玉大学大学院の田中規夫教授をコーディネーターに、「過去100年の荒川の歴史を振り返り、未来に向けて私たちが継承すべきこと」について6人のパネリストが意見を交わした。

パネリストが未来へ向けたキーワードを発表した＝平成30年11月21日、川越市やまぶき会館

◆コーディネーター

田中規夫氏
埼玉大学大学院理工学研究科教授

情報を取捨選択する力磨いて

荒川の歴史を振り返ると、流域の暮らしは洪水とともにあって、私たちは共存する知恵を持っていた。そして、現在でも、私たちの生活や暮らしに潤いを与えてくれる環境などの面から、荒川と深くかかわっていることが、意見交換を通して共有できた。

また、洪水常襲地帯だったからこそ、住民は荒川上流部改修の必要性を深く理解できたのだと思う。

防災・減災については、河川管理者の取り組みはもちろん、住民側の取り組みの重要性を指摘したい。水害の危険が迫った時に取るべき行動を時系列で整理しておくタイムラインを作成するなどして、住民自身が迅速で適切な避難につなげてほしい。

荒川の未来へ向けてはつながりという言葉がふさわしいと感じた。荒川を軸とした生き物のつながり。上下流のつながりは観光にも生かせる。防災活動を担う町内会の基盤は人のつながりだ。

それについて、意見交換では多様な視点から提言をいただいた。考えてみると、これらを貫くのは情報だ。

未来へ向けた荒川づくりには行政、流域の住民や企業などが連携して取り組み、それぞれの立場で情報を発信することが大切だ。情報を受け取る側には、その中から正しい情報を取捨選択して判断することが求められる。その能力を磨くことも大切だと思う。

古市秀徳氏
国土交通省関東地方整備局
荒川上流河川事務所長

的確な避難行動へ。情報発信

百年に一度の洪水を安全に流下させる河川整備を進めているが、途上にある。また、鬼怒川堤防の決壊など想定を超える事態も起こっている。万一に備えて、どう行動していただくか。その判断に必要な情報を河川管理者として、迅速・的確に、より分かりやすくどう提供するか。重い課題だと感じている。

避難困難者の支援も重要な課題。より早く行動していただくために、自治体とも連携しながら介護・福祉施設などへ避難計画の策定を呼びかけている。災害弱者といわれる方々への支援は、行政だけでは難しい。自治会などの地域のみなさんやご家族の取り組みがより重要になる。

荒川の未来へ向けたキーワードを荒川で（○○）をつなぐ、つなげる」とした。「（○○）にはさまざまな事柄がある。荒川の治水の歴史や技術的な哲学などを次の百年へ引き継ぎ、最新の技術や英知を結集して、地域のため、安心安全のため、環境のためにより良いものを残していくことが大事だ。

堤防をつなぐ、調節池をつなぐ、施設整備では環境との調和、安心安全をつないでいきたい。防災・減災では、国と自治体、住民のみなさんがつながって取り組む必要がある。上下流もしっかりとつながってはならない。

次の百年へ、みなさんとしっかりつながりたい。

渡辺侑造氏
戸田市美女木3丁目町会長

タイムライン、町会から家庭へ

荒川貯水池（彩湖）の東側が、私が暮らす戸田市美女木地区。かつては水害が多い土地で、洪水を防ぐために屋敷を土盛りした家もあった。明治43年の洪水の話を祖父から聞いた記憶がある。

河川改修が始まると、父の世代が工事に従事した。改修に伴って堤内地へ移転した住民も多かった。今は荒川第一調節池になっており、憩いの場として市民に親しまれ、年間に100万人以上が利用している。

今夏、美女木小学校区の7町会が合同で避難訓練を実施した。若い親子から高齢者まで400人ほどが参加。いざというとき、高齢者などの避難困難者をどう支援するか。課題が見えてきた。

今、町会には避難困難者を支援する「おねがい会員・まかせて会員」という仕組みがある。おねがい会員とは避難に支援が必要な方、まかせて会員は避難支援に協力できる方のことだ。

仕組みはあっても実際に機能するか、心配もある。数年前、町会では防災タイムラインを作成して、気象情報や河川水位などに応じた避難手順を決めた。普段から町会の班ごとに、あるいは隣近所で避難や助け合いについて話し合うなどして防災意識をさらに高めることが必要だ。こうした取り組みを進めて、各家庭へマイタイムライン作成を広げたい。

川合善明氏
川越市長

川を花と水辺の観光スポットへ

川越市東部、伊佐沼の近くで育ち、子どもの頃は魚釣りや川遊びを楽しんだ。伊勢湾台風が襲った昭和34年、私は小学4年生だった。夜半の暴風雨におびえ、翌朝には水に浸かった道路を見て驚いた。大人と一緒に、架け替え前の上江橋から眺めた濁流が恐ろしくて、その光景を今でも忘れられない。

昨秋、台風の影響で江川流域都市下水路の流域に浸水被害が発生したことから、洪水ハザードマップや防災体制などの見直しを進めている。

川越は古くから城下町として、商業のまちとして栄えてきた。その繁栄を支えたのが市街地を取り囲むように流れる新河岸川の舟運だった。

今、新河岸川を観光に活用しようと取り組みを進めている。春、桜並木の美しい新河岸川を花見舟が運行され、観光客を楽しませている。

荒川の未来へ向けて掲げるキーワードは「花と観光」。明待しているのは、JR川越線が荒川を跨ぐ鉄橋付近の堤防整備だ。完成したら、堤防一面を菜の花やコスモスなどの花で埋め尽くしてみたい。許可が得られれば、下流から歩って続く花の堤防をつくっていきたい。加えて、個人的な想いとしては川越線の架け替えを行う際に、川越線の複線化を要望したい。そうすることで、花を観光資源として使いながら、さいたま、川越、日高、飯能へと観光客の流れを変えていきたい。

堂本泰章氏
埼玉県生態系保護協会事務局長

流域の生命のつながり伝える

40年近く荒川へ通っているだろうか。流域をよく見ると、自然が背骨のように荒川沿いに残っていることが分かる。改修事業で川の姿は変わってきたが、荒川には多くの生き物がいて、生物多様性の軸になっている。

荒川の未来へ向けては「つながり」をキーワードにしたい。特に荒川は県中央部を流れている。そこに残るまとまった自然をうまいで軸にし、さらに周辺の自然とうまいで広域のネットワークにすることが重要だ。

昨秋、鴻巣と北本周辺の空をコウノトリが舞った。千葉の野田で放鳥されたもので、広域的なエコロジカルネットワークの指標として野生復帰を目指している。

一方、治水安全度が向上して水環境が安定したことなどから、自然環境が変化している。乾燥化によって樹林化が進み、砂礫（れき）河原では特有の植物が減少するなどしている。生物多様性に配慮した河川整備と河川環境の在り方について、もう一度考える必要性を感じている。

荒川ではこれまでも行政と市民団体、地域住民、さらには企業も連携してさまざまな取り組みを進めてきた。それこそは、生物多様性国家戦略にも添うものだ。

これからもつながりを深めて取り組むことが、さらなる命のつながりを伝えることになると思う。

関根正昌
埼玉新聞社専務取締役

生の声に学ぶ機会を継続して

平成9年の河川法改正で、河川整備計画の策定に住民が参加する仕組みができた。これを機に、荒川と暮らしのかかわりに注目。川とのつながりが薄れつつある中で、その記憶の断片を集めて連載特集などを組んだ。分かったのは、洪水とともにあった流域の暮らしの姿や、川の恵みを利用する暮らしの知恵だった。

もう一つの視点は、上流と下流、水源地と水の消費地である都市とのつながりだ。平成15年、京都などで開かれた世界水フォーラムを機に、自分たちの問題として引き寄せようと、荒川流域のNPOと流域面積日本一の県の新聞として川と暮らし、水源地と都市とのつながりをさらに深めたい。時間をかけ、じっくりと取り組む課題だ。

一方、早急に取り組まなければならない命にかかわる課題もある。改修が進み治水安全度が向上する中で、私たち自身の防災意識は薄れてはいないだろうか。想定を超える洪水、治水施設では防ぎきれない大洪水は必ず起こると認識を変える必要がある。

平成27年の関東・東北豪雨による鬼怒川堤防の決壊を教訓として引き寄せてほしい。逃げ遅れの問題が指摘された。

報道を通して感じるのは、体験者や実践者の「生の声」の重さだ。聞く場を継続的に設けて、学んでいくことが必要だ。地元新聞としても積極的に協力したい。

◆コーディネーター

田中規夫氏
埼玉大学大学院理工学研究科教授

情報を取捨選択する力磨いて

荒川の歴史を振り返ると、流域の暮らしは洪水とともにあって、私たちは共存する知恵を持っていた。そして、現在でも、私たちの生活や暮らしに潤いを与えてくれる環境などの面から、荒川と深くかかわっていることが、意見交換を通して共有できた。

また、洪水常襲地帯だったからこそ、住民は荒川上流部改修の必要性を深く理解できたのだと思う。

防災・減災については、河川管理者の取り組みはもちろん、住民側の取り組みの重要性を指摘したい。水害の危険が迫った時に取るべき行動を時系列で整理しておくタイムラインを作成するなどして、住民自身が迅速で適切な避難につなげてほしい。

荒川の未来へ向けてはつながりという言葉がふさわしいと感じた。荒川を軸とした生き物のつながり。上下流のつながりは観光にも生かせる。防災活動を担う町内会の基盤は人のつながりだ。

それについて、意見交換では多様な視点から提言をいただいた。考えてみると、これらを貫くのは情報だ。

未来へ向けた荒川づくりには行政、流域の住民や企業などが連携して取り組み、それぞれの立場で情報を発信することが大切だ。情報を受け取る側には、その中から正しい情報を取捨選択して判断することが求められる。その能力を磨くことも大切だと思う。

古市秀徳氏
国土交通省関東地方整備局
荒川上流河川事務所長

的確な避難行動へ。情報発信

百年に一度の洪水を安全に流下させる河川整備を進めているが、途上にある。また、鬼怒川堤防の決壊など想定を超える事態も起こっている。万一に備えて、どう行動していただくか。その判断に必要な情報を河川管理者として、迅速・的確に、より分かりやすくどう提供するか。重い課題だと感じている。

避難困難者の支援も重要な課題。より早く行動していただくために、自治体とも連携しながら介護・福祉施設などへ避難計画の策定を呼びかけている。災害弱者といわれる方々への支援は、行政だけでは難しい。自治会などの地域のみなさんやご家族の取り組みがより重要になる。

荒川の未来へ向けたキーワードを荒川で（○○）をつなぐ、つなげる」とした。「（○○）にはさまざまな事柄がある。荒川の治水の歴史や技術的な哲学などを次の百年へ引き継ぎ、最新の技術や英知を結集して、地域のため、安心安全のため、環境のためにより良いものを残していくことが大事だ。

堤防をつなぐ、調節池をつなぐ、施設整備では環境との調和、安心安全をつないでいきたい。防災・減災では、国と自治体、住民のみなさんがつながって取り組む必要がある。上下流もしっかりとつながってはならない。

次の百年へ、みなさんとしっかりつながりたい。

渡辺侑造氏
戸田市美女木3丁目町会長

タイムライン、町会から家庭へ

荒川貯水池（彩湖）の東側が、私が暮らす戸田市美女木地区。かつては水害が多い土地で、洪水を防ぐために屋敷を土盛りした家もあった。明治43年の洪水の話を祖父から聞いた記憶がある。

河川改修が始まると、父の世代が工事に従事した。改修に伴って堤内地へ移転した住民も多かった。今は荒川第一調節池になっており、憩いの場として市民に親しまれ、年間に100万人以上が利用している。

今夏、美女木小学校区の7町会が合同で避難訓練を実施した。若い親子から高齢者まで400人ほどが参加。いざというとき、高齢者などの避難困難者をどう支援するか。課題が見えてきた。

今、町会には避難困難者を支援する「おねがい会員・まかせて会員」という仕組みがある。おねがい会員とは避難に支援が必要な方、まかせて会員は避難支援に協力できる方のことだ。

仕組みはあっても実際に機能するか、心配もある。数年前、町会では防災タイムラインを作成して、気象情報や河川水位などに応じた避難手順を決めた。普段から町会の班ごとに、あるいは隣近所で避難や助け合いについて話し合うなどして防災意識をさらに高めることが必要だ。こうした取り組みを進めて、各家庭へマイタイムライン作成を広げたい。

川合善明氏
川越市長

川を花と水辺の観光スポットへ

川越市東部、伊佐沼の近くで育ち、子どもの頃は魚釣りや川遊びを楽しんだ。伊勢湾台風が襲った昭和34年、私は小学4年生だった。夜半の暴風雨におびえ、翌朝には水に浸かった道路を見て驚いた。大人と一緒に、架け替え前の上江橋から眺めた濁流が恐ろしくて、その光景を今でも忘れられない。

昨秋、台風の影響で江川流域都市下水路の流域に浸水被害が発生したことから、洪水ハザードマップや防災体制などの見直しを進めている。

川越は古くから城下町として、商業のまちとして栄えてきた。その繁栄を支えたのが市街地を取り囲むように流れる新河岸川の舟運だった。

今、新河岸川を観光に活用しようと取り組みを進めている。春、桜並木の美しい新河岸川を花見舟が運行され、観光客を楽しませている。

荒川の未来へ向けて掲げるキーワードは「花と観光」。明待しているのは、JR川越線が荒川を跨ぐ鉄橋付近の堤防整備だ。完成したら、堤防一面を菜の花やコスモスなどの花で埋め尽くしてみたい。許可が得られれば、下流から歩って続く花の堤防をつくっていきたい。加えて、個人的な想いとしては川越線の架け替えを行う際に、川越線の複線化を要望したい。そうすることで、花を観光資源として使いながら、さいたま、川越、日高、飯能へと観光客の流れを変えていきたい。

堂本泰章氏
埼玉県生態系保護協会事務局長

流域の生命のつながり伝える

40年近く荒川へ通っているだろうか。流域をよく見ると、自然が背骨のように荒川沿いに残っていることが分かる。改修事業で川の姿は変わってきたが、荒川には多くの生き物がいて、生物多様性の軸になっている。

荒川の未来へ向けては「つながり」をキーワードにしたい。特に荒川は県中央部を流れている。そこに残るまとまった自然をうまいで軸にし、さらに周辺の自然とうまいで広域のネットワークにすることが重要だ。

昨秋、鴻巣と北本周辺の空をコウノトリが舞った。千葉の野田で放鳥されたもので、広域的なエコロジカルネットワークの指標として野生復帰を目指している。

一方、治水安全度が向上して水環境が安定したことなどから、自然環境が変化している。乾燥化によって樹林化が進み、砂礫（れき）河原では特有の植物が減少するなどしている。生物多様性に配慮した河川整備と河川環境の在り方について、もう一度考える必要性を感じている。

荒川ではこれまでも行政と市民団体、地域住民、さらには企業も連携してさまざまな取り組みを進めてきた。それこそは、生物多様性国家戦略にも添うものだ。

これからもつながりを深めて取り組むことが、さらなる命のつながりを伝えることになると思う。

関根正昌
埼玉新聞社専務取締役

生の声に学ぶ機会を継続して

平成9年の河川法改正で、河川整備計画の策定に住民が参加する仕組みができた。これを機に、荒川と暮らしのかかわりに注目。川とのつながりが薄れつつある中で、その記憶の断片を集めて連載特集などを組んだ。分かったのは、洪水とともにあった流域の暮らしの姿や、川の恵みを利用する暮らしの知恵だった。

もう一つの視点は、上流と下流、水源地と水の消費地である都市とのつながりだ。平成15年、京都などで開かれた世界水フォーラムを機に、自分たちの問題として引き寄せようと、荒川流域のNPOと流域面積日本一の県の新聞として川と暮らし、水源地と都市とのつながりをさらに深めたい。時間をかけ、じっくりと取り組む課題だ。

一方、早急に取り組まなければならない命にかかわる課題もある。改修が進み治水安全度が向上する中で、私たち自身の防災意識は薄れてはいないだろうか。想定を超える洪水、治水施設では防ぎきれない大洪水は必ず起こると認識を変える必要がある。

平成27年の関東・東北豪雨による鬼怒川堤防の決壊を教訓として引き寄せてほしい。逃げ遅れの問題が指摘された。

報道を通して感じるのは、体験者や実践者の「生の声」の重さだ。聞く場を継続的に設けて、学んでいくことが必要だ。地元新聞としても積極的に協力したい。